

クリスマスの意味

2009.12.15(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ルカの福音書 1章26節から56節

ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。御使いは、はいて来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知らないのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。」マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので

満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。

私たちは日々の生活の中で多くのことを経験します。どうしてなのか、なぜだろうかといくら考えても分かりません。誰も答えられません。しかし、主はそのすべてを支配しておいでになり、御名のゆえに私たちを導いてくださいます。

最近与えられたみことばの一つは、ピリピ書 1 章 28 節です。
ピリピ人への手紙 1 章 28 節前半

どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。

私にもいろいろなつらいことがあります。この間十日間だけ入院しました。病気のための入院でしたが、振り返ってみると、お医者さんたちにも、十五人の看護婦さんたちにも本を渡すことができ、個人的に話すこともできたので、有り難かったのではないかと思うようになりました。しかし、はじめは目も開けたくない。開けられない。そうなるのみことばもゆっくり読む力がないのです。しかし、その時、一通の手紙で励まされたのです。必ず毎日読みました。どのような手紙であったかと言いますと、

「愛するベック兄へ。主イエスのお名前を心から賛美します。ベック兄、お祈りを本当にありがとうございました。愛する S 兄は（ご主人のことです。）イエス様のもとに帰って行きました。たくさんのみことばの種が蒔かれました。天国がものすごく近くに感じられ感謝です。イエス様は素晴らしい。早く迎えに来てくださいますように。もうすぐ天国ですよ。 S・M、K、T」

この手紙を読んだ時、いや有難い！と。つまり、主が生きておられる証拠ではないでしょうか。主は生きておられ、背後にはっきりとした目的をもって導いてくださると考えると、本当に感謝です。召された S 兄は多分 42 歳だったでしょう。彼は、反対し続けた自分の母親とお姉さんですか、妹さんですかに、長い手紙を書いたのです。いつか紹介します。素晴らしい証しです。主が生きておられる証拠そのものです。

今日はクリスマスのシーズンですから、「クリスマスについて」話しましょう。

パウロは、次のように書いたことがあります。『言葉に言い表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。』確かにクリスマスをお祝いする人はたくさんいます。しかし、クリスマスの本当の意味が分かっている人は非常に少ないのではないのでしょうか。

クリスマスの本当の意味を知るために、「人間」について、つまり「生まれながらの人」

について、観察すべきではないかと思います。なぜなら、イエス様は、生まれながらの人々、即ち罪人を招くために、失われた人々を尋ね出して救うために来られたからです。

もう一箇所読みます。マタイ伝の 1 章 18 節から二、三節お読みします。

マタイの福音書 1 章 18 節から 21 節

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

主なる神の言い尽くせない賜物の名は、「インマヌエル」という名前です。インマヌエルとは、「神、我らとともにいる」ということを意味します。

しかし、生まれながらの人、まだ救われていない人は、主なる神との交わりを少しも持っていません。これこそが恐ろしい事実です。生きておられる唯一のまことの神は、人間をご自分の代表者、主の利益を代表する者としてお造りになりました。言うまでもなく、この人間は完全でした。この人間の環境も、間違いなく完全でした。それだけではなく、この人間は、主なる神との完全な交わりを持っていたのです。

人間が造られた目的とは、何だったのでしょうか。もちろん「父なる神の性質にあずかるため」、「父なる神の愛に応えるため」、それから「父なる神のいのち、即ち永遠のいのちを宿すため」に造られたのです。この人間は本当に幸せでした。

しかし、人間はこの大きな恵みの提供を退けました。悪魔の誘惑によって、わざわざとなる選択をしてしまったのです。その結果とはいったい何だったのでしょうか。人間と主なる神との交わりは断ち切られました。「人間」と、「いのちの泉である主」との結びつきが本当に断ち切られました。以前は、「信仰と愛の交わり」があったのですが、今は恐怖と恥辱の交わりとなってしまったのです。

人間のわがままによって、悪魔との結びつきが生まれました。人間は悪魔の権力の下に入れられ、悪魔は今や人間を合法的に支配するようになったのです。悪魔は思ったでしょう。「我々は勝った。主なる神のみこころは駄目になった。人間は自分たちの奴隷となった」と喜んでいたでしょう。自分勝手な行動によって、人間は主なる神から離れ、暗やみに入りました。人間の精神は、主なる神に対して盲目となり、死んだものとなったのです。

この死、このいわゆる「霊的な死」とは、いったいどういうものなのでしょう。人間のわがままによって、人間の霊と主なる神の霊は分かれしました。ですから人間の霊は、主な

る神の導きにもはや応じようとしなくなってしまったのです。人間の霊は主なる神に対して死んだものとなった、とあります。よく引用される箇所エペソ書の2章1節から見ると、次のように書かれています。パウロがエペソにいる兄弟姉妹に書いた言葉です。

エペソ人への手紙 2章1節から3節

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

創造主なる神から離れるということは、「霊的な死」を意味します。人間の墮罪の一番大きな結果は、「霊的死」でした。なぜなら、もし新しく生まれ変わらなければ永遠に死んでしまうからです。創世記の中で、主は完全なものとして造られた人間に言われました。

創世記 2章17節

「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

死とはどういうものか、もちろん分からなかったのです。続いて読むと分かります。人間は、禁じられている実を取って食べました。しかしその後も、もちろん肉体的には生きました。相変わらず元気でした。その後にも人間が願い望むたましいは生きていましたが、しかし霊的には死にました。

ところが、この「霊的死」とは、どのようなことを言うのでしょうか。人間の目は、目の前にあるものを見るために備えられています。しかし、今この目の視神経を断ち切るならば、たとえ天気が良く、景色が素晴らしくても、空を見ることができません。目が死んだものになってしまったからです。聾者の耳も同じでしょう。人が話しても、鳥が美しい声でさえなくても、また素晴らしいオーケストラの演奏を聴いても、無駄なのではないでしょうか。聾者の耳は、あらゆる音に対して死んでいるからです。

人間が主なる神に頼らずに行動した時、霊的に死んでしまいました。人間は、霊によって主なる神を認め、主との交わりを持っていました。しかし、霊的に死んだのです。人間は、主なる神に対して結局応えられなくなってしまったのです。人間はなおも霊を持ち続けていましたが、「主なる神の霊」、即ち「いのちの泉」から離れてしまったので、その人間の霊はいのちを持っていません。

盲人は目を持っていますが、その目は見えません。同様に、死んだ人間の霊は、神を認めることができません。それが、「霊的な死」です。人間の霊は、主なる神から離れると死んでしまう。これが、「霊的な死」です。

もし、私たちが聖書の事実について、神の素晴らしい賜物であるイエス様について、救われていない人々と話すなら、おそらく通じません。私たちを睨んで、少しも分からないのではないのでしょうか。多分その人はとても良い教育を受けて信心深い人であるかもしれませんが、聖書の話なので、彼らにとって馬鹿げたことです。屍に一生懸命話しても応えられません。同じように、イエス様を知らない人は、主なる神の御霊の賜物を受け入れられないとあります。よく読む箇所です。コリント第一の手紙2章14節を見ると、一文章だけです、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 2章14節

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

しかし、主なる神はご自分の御子であるイエス様を遣わすことによって、救いの道を開いてくださいました。イエス様が人間となられることは、もちろん何千年も前から預言されていたのです。聖書の示している主イエス様とは、天地創造以前から、神の小羊として死ぬことに承諾されたのです。人間のわがままに対する聖なる神のお答えは、「イエス様の犠牲の死」でした。

しかし、死ぬために、イエス様はまず人間にならなければならなかったのです。神としては死ねないからです。イエス様が人間となられることは、初めに創世記3章15節に預言されています。次のように書かれています。

創世記 3章15節

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

このように主なる神は、蛇、即ち悪魔に言われたのです。この女から生まれる人は、特に力強い方であることが預言されたのです。そしてこの方は、女の末(すえ)であることもはっきりと書いてあります。これは注意すべき事実ではないでしょうか。普通、子どもが生まれた時、いつも男の末から生まれると言います。御子イエス様の場合、ご自分の誕生のために人間的な父親は必要ではありませんでした。ですから、女の末と聖書は語っています。「女の末は悪魔のかしらを砕く」と預言されました。また悪魔に打ち勝つとも約束されたのです。

この創世記3章15節には、救い主が女から来る。救い主は悪魔に打ち勝つ。救いの代価は苦しみであろう、ということがはっきりと預言されたのです。イエス様は処女からお生まれになりました。そして、十字架で悪魔に打ち勝たれました。救いの代価は、救い主のいのちでした。

イエス様が人間となられることは、次のように預言されました。イザヤ書 7 章になります。
イザヤ書 7 章 1 4 節

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

「インマヌエル」とは、「救いの神、我らとともにいる」ということを意味します。

ここでひとりの人、即ちイエス様のうちに、二種類の「いのち」があります。「主なる神、私たち即ち我ら人間とともにいます」。主なる神は人間的な外形をとるようになられる、と預言されたのです。イザヤ書 9 章 6 節を見ると、また次のように書かれています。

イザヤ書 9 章 6 節

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

もしイエス様が普通の人間だったら、決してこのような名前をもっていないはずで

す。旧約聖書の最後のほうにあるミカ書を見ると、この来たるべき約束された救い主はどこでお生まれになるのかも、はっきり書かれています。

ミカ書 5 章 2 節

ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。

とあります。イエス様のお生まれになる場所についてはっきりと預言されたのです。この預言は、イエス様の誕生の何百年も前でした。

聖書を読むと、イエス様は人間的な外形をとられた、父なる神の御ひとり子であったことがよく分かるはずで

す。墮落した人類を救うために、イエス様は人間となられたのです。自由意志をもって、イエス様は墮落した全人類を救うために、この地上に来られました。ご自分が人間になられることは、考えられない大きな犠牲でした。

クリスマスの時、多くの人々は「イエス様の誕生」について考えますが、ちょっとおかしいのではないのでしょうか。クリスマスは、イエス様の始まりではありません。この地上に

来られただけのことでした。その以前、つまり世が造られる前に、主イエス様は父なる神とともにあられた、と聖書は記しています。イエス様は、祈りの中で告白なさいました。

ヨハネ伝 1 7 章を見ると、次のように書かれています。
「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」

とイエス様は祈りの中で言われました。

コロサイ書 1 章 16 節に、世が造られる前に、万物よりも先に、イエス様は父なる神のみそばで栄光をお持ちになっていたことが書かれています。

コロサイ人への手紙 1 章 16 節

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。

イエス様の偉大さについて、いくら考えても、もうお手上げなのです。想像できません。理解できません。イエス様によってすべてが造られたのです。何という素晴らしい主でありましょう。この素晴らしいイエス様は、自由意志を持って、墮落した人類を救うために来られました。ピリピ書 2 章 6 節。よく礼拝の時に読まれる箇所です。

ピリピ人への手紙 2 章 6 節から 8 節

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

何という「主」でしょう。私たちの主イエス様は。私たちを救うために、イエス様は天国のすべての栄光をお捨てになりました。しかしイエス様にとって、人間になれることは簡単ではなかったのです。とても難しかったに違いないのです。聖書は語っています。

コリント人への手紙・第二 8 章 9 節

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

天国の栄光をお持ちになっておられたイエス様は、人間とともに、即ち悪魔の奴隷とともに生活をなさらなければならなかったのです。ですから、この人間から離れるために、イエス様はよく夜中、山に登って父なる神と話し合われたのです。もしイエス様が十字架の上で死なれなくても、ご自分が人間になれることは考えられない犠牲だったでしょう。イエス様は、私たちのために人間になりました。どうして人間になられたかと言いますと、結局死ぬためです。

マタイの福音書 20 章 28 節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

とあります。イエス様は、何か教えるために来られたのではないのです。死ぬためです。

そして、イエス様は、私たちが救うために人間になられただけでなく、奴隷のように弟子たちの足を洗ってくださいました。ヨハネ伝 13章4節、5節を見ると、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 13章4節、5節

夕食の席から立ち上がり、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。

もちろん、そのような習慣だったのです。お客が来ると、すぐ足を洗うようだったのですが、それは普通もちろん家の主人がする仕事ではなく、いつも奴隷の仕事でした。奴隷だけがする仕事でした。天国のすべての栄光をおもちになっていたイエス様が、私たちのために人間となられ、奴隷の仕事をしてくださったのです。

もう一箇所読みましょう。非常に理解しにくい箇所です。初めて読むと、ちょっと冷たいのではないかと、イエス様は、と。

マタイの福音書 15章21節から23節前半

それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。

ひどい！知らん顔をなさったようです。

マタイの福音書 15章23節後半

そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです。」と言ってイエスに願った。

信心深い祈りに、ひどいではないか、あの弟子たちは。

マタイの福音書 15章24節から28節

しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と言われた。しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください。」と言った。すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」と言われた。しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はそ

の時から直った。

女は、もう嬉しくて嬉しくて仕方がなかったと思います。しかし、26節です。「すると、イエスは答えられて、『子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くない』」と言われました。この女は、もちろん特別に選ばれた民に属していなかったのです。ユダヤ人ではなく、カナンの人でした。即ち、異邦人でした。聖書によると、ユダヤ人たちは子どもであり、異邦人は犬のように汚れた者でした。イスラエルの民は主なる神によって選ばれた民であり、ほかの国々の者は異邦人であり、犬と同じような者です。原語を見ると、もっと強い言葉が使われています。即ち「捨てられた犬」、「追い出された犬」となっています。もちろん聖書は、イエス様は異邦人のためにも死なれた。即ち、捨てられた、追い出された犬のような者のためにも死なれた、とあります。

追い出された、捨てられた犬は、誰にも属していません。自分の家を持っていません。しかしイエス様の生活も、同じだったのではないのでしょうか。イエス様は正直に告白されたのです。

マタイの福音書 8章20節

「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません。」

私はホームレスそのものです、と。イエス様は、殴られ、虐待され、最後に十字架につけられたのです。私たちのために十字架につけられたのです。イエス様は、本当に私たち一人一人のために人間となられ、奴隷の仕事をしてくださり、捨てられた犬のように取り扱われただけではなく、罪のかたまりとされた、と聖書は記しています。それももちろん理解できません。考えられないことです。けれども、パウロはコリントにいる兄弟姉妹に書いたのです。

コリント人への手紙・第二 5章21節

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

イエス様ははっきり言われました。「わたしは必ず罪人らの手に渡され、十字架につかれ、そして三日目によみがえる」と仰せられたのです。悪魔はイエス様に、この世のすべての国々とその栄光を提供したのです。しかしイエス様は、「結構です」と断られたのです。私たちのために死ぬことが、イエス様の心からの願いでした。

テモテへの手紙・第一 3章16節

確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

とあります。

パウロは、全部言い表わすために、ローマ書の中で次のように書きました。よく知られている箇所です。

ローマ人への手紙 8章32節

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうしても、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありません。

ちょうど10年前だったのですが、ある悩んでいる奥さん、S・Nさんは、自分の住んでいる所の11階から飛び降りたのです。もちろん死ぬためにです。ご主人はアルコール中毒で、二人の子どももいました。しかし「もう死にたい。希望がない」と思って。11階からです。けれど、死ねませんでした。下の古い洗濯機の中に入ってしまったのです。その後医者と看護婦は、大変神経を使うようになりました。今回こそ、入院中に必ず死ぬだろう。彼女を夜昼注意深く見なくてははいけない、と。

見舞いに行ったとき、彼女の父親は病室の前の廊下の長椅子に座っていました。「お父さん、ちょっと会ってみましょうよ」。「いいえ。娘の顔が見られない」。もちろん分かりましたが、「お父さん、私も娘さんに会ったことはないけれど、一緒にどうですか」。お父さんも仕方がなくて一緒に病室に入ってしまった。お母さんも入っていました。幸いに集会の姉妹がその病院に勤めていたのです。Nさんは、その日母親と一緒に祈るようになったのです。自分のわがママを赦してください、と。

何週間か後に、同じ病院の中で、(大きな病院ですからコーヒーショップもありました)、あのコーヒーショップで交わりましょう、と。病院のオーナーはとても親切で、「ここで祈ってもいいですよ。賛美してもいいですよ。何をしてもいいですよ」と。集会らしいものをする事になりました。その時、あのNさんは、何と言ったかと言いますと、「生きていて良かった!」。母親は喜びのあまり泣いてしまったのです。

イエス様が代わりに罰せられ、死なれたから良かったですね。

イエス様は近いうちにまた来られますから嬉しい、という態度をとることができたら、素晴らしいのではないのでしょうか。

了